

第一回昭和女子大学児童文学賞選考結果

今年度から新たに創設された昭和女子大学児童文学賞は、若いみなさんにぜひ文学に親しんでいただきたいとの思いから、「あなたの夢や想いを童話というスタイルで表現してみませんか？」というキャッチフレーズのもと、全国の高校生を対象に、フレッシュな創作児童文学を募集しました。

選考委員は、坂東眞理子(昭和女子大学長)・前原金一(同副理事長)・茅場康雄(同日本語日本文学科長)・西本鶏介(同名誉教授・児童文学作家)・石井直人(同非常勤講師・白百合女子大学教授)の5名です。

第一次および第二次選考委員会を経て、最優秀賞は該当作なし、優秀賞に木村文「フランスと私の旅行記」、風見夏紀「キグルミの町」の2作を決定しました。

選評 選考委員 西本鶏介先生

選考を終えて

児童文学は大人の小説や詩と同様に一つの文学ジャンルとして独立したものです。子どもを対象にしている、彼等のために書くというのではなく、あくまで自己表現の文学として面白く読める作品でなくてはなりません。ファンタジーによって現実では見えない世界を描くことができ、子どもにたちかえって人間の内面をいきいきと語ることも可能です。この自由で魅力的な方法からどんな作品が寄せられるか期待していましたが、残念ながら最優秀賞の該当作はありませんでした。それでも優秀賞の二編を選ぶことができました。

木村文さんの「フランスと私の旅行記」は猫である「私」とこぐまの思いがけない旅を通して、見知らぬ者同士が次第に心を寄せ合っていく様子が、今日の若者らしくクールにテンポよく描かれています。とりわけぶっきらぼうな会話が面白く、情緒的な友情物語ではない新しさを感じました。今日の人間関係の希薄さを二匹の動物がいても関心を示さない電車の乗客に象徴させるところも効果的です。それ故、二匹を助けてくれたお姉さんの親切が印象深く、ラストを盛りあげることができました。素朴なお話のように見えながらも元の飼い主と再会するまでの猫とこぐまの旅に込めた作者の思いがよく分かります。

風見夏紀さんの「キグルミの町」はユニークな個性を持つ不思議で味わいのある童話です。誰もが生まれたときから一人一人ちがったキグルミを着ているのはなぜか、転校生に尋ねられ、その理由を魔女のおばあさんに聞きに行くところから一気に読者を物語の世界へと運びこんでくれます。キグルミを着ることは、自分の心を守るためという理由はともかく、キグルミを堂々と脱ぎ捨てる人間に成長する方がより説得力のある作品になったのでは。またおばあさんに聞くのではなく、自らの力で探る方が更に面白くなったのではとも思いますが、豊かな発想力と人間を見る目の深さに感心しました。文章もうまい。

選評 選考委員 石井直人先生

「フランセと私の旅行記」は、冒頭の一行「校門を出たら、くまがいた。」で、もう勝利している感じです。ちょっと笑ってしまいました。また、「私」が猫というのも面白い。明るい雰囲気とテンポの良さがいいと思います。実は、二人の元飼主(?)が同じだったという結末はデキスギか? でも、これこそが童話の「幸福の約束」なのですね。三毛猫は、生物学的に厳密にいうとメスなのですが、リアリズムやノンフィクションではないのでよろしいか、と。

「キグルミの町」は、これも童話の特徴ですが哲学的。「誰もが皆生まれた時からキグルミを着ている」という設定のアイデアが秀逸。その町にキグルミを着ない転校生がやって来る。それなりのルールでまったりしていた共同体に外部から異人が訪れる。現代の寓話ともいえませう。お婆ちゃんがキグルミの謎を語る途中で突然口を噤んだら? とか、キグルミを着なくてもいい人は実は皮膚がモビルスーツなのか? とか、この世界を更に膨らませる楽しみがあると思いました。